

---

# トランセンド

kan\_sta\_ku

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

トランセンド

### 【ZPDF】

Z1801T

### 【作者名】

k a n \_ s t a \_ k u

### 【あらすじ】

少年が能力を取り戻すとき、全ては動き出す

その時世界は裏で争いが起っていた

少年はその能力で世界をどう動かしていくのか……

なんかこれだと内容分かりにくいですね  
まあ気になつたら一度目を通してみて下さい

感想、アドバイスなど待つてます

## — PROLOGUE — (前書き)

初めてでお見苦しこもですが、お手柔らかにお願いします

## —PROLOGUE—

### —PROLOGUE—

涛河高校、1年A組の教室、放課後…

「乃亜一緒に帰ろ」

「おう…つて実琉！わかつたから毎回毎回抱き着くな！」

「…乃亜…私の事嫌いなの？…」

実琉の目にみるみる涙が浮かんでくる

「うう…あ、あも…そんなことねえから…」

「なーんだ！じゃ、いいじゃん。問題無し！」

実琉は途端に笑顔になり、乃亜の腕に抱き着き歩く

「あのなあ…はあー」

これはいつもの流れ

2人（斎藤乃亜と月影実琉）は一見恋人のようであるが、実際はただの幼なじみだ

乃亜は今度こそ一発三つもハマリ……と嘆息の声だが毎度いつもして打ち砕かれるのである

この日々がいつもの光景…これが当たり前だと乃亜は思っていた：

## 第1章　－第1話 異変－

### －第1話 異変－

乃亜は実琉と一緒に通学路を歩いていた

「実琉、今日なんか人通り少ないな」

普段なら乃亜の言葉にはすぐ言葉をかえす実琉だが、返事が返つてこない上、いつも笑顔の実琉が無表情である

「実琉？どうした？そんな怖い顔で」

「ちょっと静かに！私から離れないで」

（実琉なんか変だな、どうしたんだ）

乃亜は実琉の言う事を聞くことにした

しばらく歩くと実琉は路地に入ると同時に走り出す

乃亜は必死に実琉を追いかける

（てが実琉足はやつ、こんなに速かったか？）

突然後ろで爆発が起こる

「うわっ！…何だ！？」

「乃亜！…走つて逃げて！…」

「実琉？いつたい？」

「いいから早く！」

実琉がそう叫ぶと同時に爆発が起こったほうから乃亜に銃弾が飛んでくる

乃亜は急いで物陰に避難する

爆発の煙がなくなると

そこには5人のバトルスーシのような物を着て銃を持った男たちがいた

「何だ一人だけか」

「でもあれ月影実琉ですよ」

「えつ？誰？聞いた事ないぞ」

「Aランクのトランセンダーです。つい最近Aになつたんですよ。まだほとんど知られていませんから、知らないのもむりないです」

「倒したら俺ら昇進ですね」

「一応例の物要請しとけ、1人だが相手はAランクだ」

「そりと決まれば行きますか」

男たちは実琉に向かつて銃弾を撃つ

実琉は横に転がって避けると、手を前に突き出す

すると光が手の中に集まる

光があさまると手には1丁のロケットランチャーが握られていた

実琉はそれを男たちに向かつて発射する

男たちの近くに着弾し4人を吹き飛ばす

4人はバトルスーツを来ていたため頭を打つて気絶するにどじました

(な、何が起きているんだ?)

乃亜は陰から戦闘を見ているが状況把握できないでいる

なんとかロケットランチャーで気絶しなかつた一人が背中の機械から煙を排出する

辺りは視界が悪くなつた

乃亜の位置からは実琉がからつじて見えるくらいだ

すると突然実琉に先ほどの一人がナイフで切り掛かる

すると実琉はロケットランチャーを手放すロケットランチャーは光  
になる

実琉はまた手を前に突き出す

するとここんどは一振りの刀が現れ、受け止める

乃亜は田をこらし実琉の戦闘を見ている

すると実琉の後方辺りから唸るような音が聞こえる

(モーター音?)

音のするほうを見ると微かに大きな黒音のするほうを見ると微かに  
大きな黒い陰が見える

実琉は男のナイフを受け止めるのに必死で気づいていないようだ

突然男が実琉から離れる

(まさか!)

乃亜は陰から飛びだし実琉に向かつて走り出し叫ぶ

「実琉！危ない！」

実琉に乃亜から声がかかる

「乃亜でできちゃダメ！」

「そんなこと言つてる場合か！」

「だからだ、め…」

そこまで言つて実琉は後ろにある何かにきづく

乃亜は実琉を抱きしめそのまま前に飛ぶ

その瞬間実琉が立つっていた所にまばゆい光を放つ光線が通過する

「ちつ避けられたか、まだブツの存在を知られるわけにはいかない  
！…退却！」

煙がなくなり視界がはつきりした時にはそこには乃亜と実琉の2人、  
そして地面が一筋焼け焦げているだけであった…

## —第2話 もつ一つの社会—

月影家の家

「乃亜、起きないよう…私のせいで…」

「実琉あなたのはじめじゃないわ、時がきてしまった…それだけ」

乃亜は実琉を間一髪で助けたあと急に苦しみだし気絶してしまったのだと

「うう、ん?…あれ俺って」

乃亜が目を覚ます

「乃亜つーよかつた…」

突然実琉が飛びつく

「うおう…心配かけて悪いな…、早紀さんもありがとうございま  
す」

「いいのよ、私にとつて乃亜は息子みたいなもんなんだし…それに  
乃亜の両親との約束があるし」

乃亜は現在実琉とその母親の月影早紀と3人で暮らしている

乃亜の両親と実琉の両親は親友であった

しかし、乃亜の両親、そして実琉の父親は2人が小さい時に死んでしまい、そのため現在は早紀が2人の世話をしている

「乃亜、少し話があるの、実琉も一緒にいらっしゃい」

3人はリビングに移動する

「まず、とりあえず先に言つておくわ。この話を聞いたらもう後戻りはできない…それでも聞く？」

「……はい！」

乃亜はいきなりのことで戸惑つたが決心がついたのか、力強く頷く

「なら、ます……私と実琉、そして乃亜はトランセンドーよ

「トランセンドー？」

「そう、簡単に言えば能力者のことよ。実琉が使ったのを見たでしょう？、この国には知られていないだけでたくさんのトランセンドナーが居る、そして中にはトランセンドナーの存在を知る一般人もいて、トランセンドナーを良く思わない人たちがいる」

「それってもしかしてさつき実琉を襲つた？」

「そうよ」

「…でも、俺がそのトランセンドーとしても、能力なんて使ったことないですよ?」

「そう、今回の本題はそこにあるのよ」

「俺が能力がないトランセンドーってことにですか?」

「そう、正確には能力がないんじゃなくて、使えない…いや使えないくなったトランセンドーってことね」

「?…どういふことですか?」

「乃亜はトランセンドーだつたそれもかなり強力な…普通トランセンドーはメインの能力が1つ、サブの能力はない人がほとんどで、1つある人が稀にいる、例えば実琉の場合は…」

「私は…乃亜は見たからだいたい分かると思うけど、メインは武器を造り出す能力、ただ、制限があつて、自分より小さい武器しか造り出せないよ、それに武器の形を精密にイメージする必要があるの、あとサブで、身体能力を1・2倍に出来る、その分反動で使い終わつたあとのすごい筋肉痛になると使い過ぎると負担が大きすぎて肉離れ起こしちゃうの」

「そう、大抵能力は物心ついたときくらいに使えるようになる。そしてあなたもちょうどそのくらいに能力が発現したわ、でもその能力には問題があつたのよ」

「問題ですか?」

「やつ、それは普通一つのはずのメインが二つあったのよ」

「お母さん？確かに異常は異常だけどそれと乃亜が能力使えないのどう関係あるの？」

「そもそもメイン能力を使うとき脳をフル稼動してやつと使つていの、サブはメインを制御したときの余波みたいなものが働いて起きるからメインの能力の種類によつたらいくつかあつても平氣だし、メインと同時に使つても問題ないんだけど、メインを同時に使うと脳が処理しきれなくなるかもしれない危険性があつたのよ、そこで、処理装置を脳に埋め込み自動制御して能力を抑えこんだ…」

「そんな！脳に装置を埋め込むなんて！」

実琉が怒る

「しようがなかつたの…メインが2つだなんて前例がないし、制御しきれなかつたら暴走したり、命を落とす可能性だつてあつた。初めは迷つてたのよ、でも乃亜が一度さつきのように気を失つて生死の境をさまよつた。これしか残された手段はなかつたの。そうして乃亜は能力を使えなくなつた代わりに生き延びた。」

「でも早紀さんどうして今その話を？」

「どうやら乃亜は能力をとりもどしたみたいなの」

「えつー！でも装置があるつて…」

「装置関して問題があつたのよ、それは乃亜の能力と相性が悪かつたのよ、あなたの能力は、脳波検査によれば一つは範囲7m以内で

電気を操る能力、もう一つは一度触れた物の実体を無視できる能力。もし制御装置の制御出来る範囲以上の能力が使用されれば、前者のほうではショートして機能停止、後者なら少し動いただけですぐに頭のなかから出てしまう。サブの方は脳波では分からないし、能力発現してすぐに装置を埋め込んだから、使っているところを見てないから分からないわ」

「なるほど、でも装置が作動してないってどうしてわかるんですか？」

「ああそれは……ほら」

早紀は乃亜に集積回路のようなものを取り出す

「これさっきの現場の近くに落ちてたの、それに私透視の能力あるから…とりあえず今話せることはこれくらいかしら…っと忘れるところだつた…はいこれ、あなたのお父さんがこの時がきたら渡してつて」

ハンドガンのような形の物を取り出す

乃亜は少し動かしてみると曲がっていた部分が真っ直ぐになり短い、棒状にもなることがわかった

「そう、私もそこまでは分かるんだけど、それ以外は…」

(?、情報が頭の中に入ってくる?)

乃亜はその情報のままに能力を使って電気を流してみる

「起動…使用者ヲ確認…斎藤乃亜ノ使用許可…使用者トノコネクト完了…斎藤乃亜を正式ナ使用者トシテ登録」

「うわっ…すげえ」

棒は黒から銀色にかわり棒の先端からレーザーで出来た刃のような物がでてくる

乃亜は最初のハンドガンのような形に戻してみる

すると刃は無くなる

そこで乃亜は引き金が出来たことに気づく

乃亜は窓を開け、空に何もないことを確認し引き金を引いてみる

すると今度は刃の出ていたところからレーザーのようなものが発射された

「スゴイね乃亜…でもなんで使い方わかったの?」

「なんかこれをみたら情報が頭の中に流れてきて…」

「そう…もしかしたらサブで機械関連の情報把握の能力があるのかかもしれないわ、あと乃亜これだけは一応忠告するわ、絶対にメイン2つを同時に使わないように、小さい時よりは脳が発達していく、能力を両方持つことは出来るから、制御出来るかもしれないけど…また同じようになる可能性の方が高いから」

「はい、わかりました」

警報が鳴り響く

「どうした何があった!!」

「地上から攻撃をつけました!」

「何故見つかった、トランセンドーの能力の干渉は受けないはず。なにで攻撃された?」

「見た時はレーザーですが、圧縮された電気の塊のようなものです、このようなことが出来るのはトランセンドーかと」

「くわッラーンセンドーめ!絶対に潰す!…非常用ポッドで脱出するべ」

非常用ポッドが発射した直後宇宙で小さな何かが爆発した

## —第3話 組織と任務—

「あと、説明しなきゃいけないのは…協会についてかしら」「協会…って何ですか?」

「正式名称TSS（Transender Summary Society）、日本語でいうトランセンダー統括協会ってところ、トランセンダーは全員TSSに登録しなきゃいけない決まりなの」

「ちなみにお母さんはTSSのトップ12人の1人なんだよ」

「す、す”い”ですね…」

「ありがとう、でもいま2人空席があるのでね」

「えつ何でですか?」

「今、例の実疏を襲つた組織と一部の無能力者を良く思つてないトランセンダーたちの組織が対立してよく戦闘があるのよ、TSSはその戦闘に介入して鎮圧してるんだけど、Aランクのトランセンダーでもトランセンダーと武装した人たちを同時に相手にして、それも非殺傷でやる”う”とするとかなりキツイのよ、2人はその戦闘でね

…」

「そりなんですか…そういうえばそのランクってなんですか?」

「ランクはTSSが定めるもので、そのトランセンダーの強さを表すもの、強い方からA、B、C、Dとあるわ、ほとんどがCとDで

Bが全体の30～40%つてとこかしら、Aランクは現在トップ1  
2人に所属してる10人と実琉くらいかしら」

「実琉もスゴイんだな！！確かにさつき強かつたもんな…でも何で  
実琉だけAランクなのにトップ1-2に入つてないんですか？」

「年齢的な問題がほとんどね、トップ1-2に入ると仕事や任務が忙  
しそぎて学校に通いにくいし…よし今日はもう遅いからこれくらい  
にしましょう、明日は乃亜の登録の更新に行かなくちゃいけないし、  
私はトップ1-2の会議もあるから」

次の日

TSS本部前

「うわあすげえ」

本部は周りの建物より遥かに巨大でデザインも近未来だ  
「表向きは大手製薬企業の本社なの、さあ早く行きましょう」

早紀は建物の中をどんどん進んでいく

5分くらい歩くと大きな吹き抜けの部屋にたどりついた

「いよいよここが本部よ」

3人は受付に向かう

早紀は受付の人に小声で何かを話し封筒を渡す

受付の人は急いで奥に入つて行つた

3分ほどして若い男の人が出て來た

「紹介するわ、彼はトップ12の一人、道上拓海よ」

「紹介された通り、僕は道上拓海だよろしく」

「斎藤乃亜です、よろしくお願ひします」

「そうか、君が…あと、実琉ちゃん久しぶり」

「はい」無沙汰してます

「今日はレベル測定の為に彼と模擬戦をしてもらつわ」

「えええー!? こんなに強い人とやるんですか?」

「大丈夫よ、ここは模擬戦場は特殊でね、怪我したり死ぬつてことはないのよ、そのかわり攻撃をくらうと情報化されてゲームみたいにメーターが減つていくの」

「いや、そういうことじゃなく…」

「それに、乃亜が測定するならランクAが相手じゃないとダメだと思つわ、はい文句言わない」

「はい…」

「それでは制限時間3分、開始！」

「乃亜君をちからからビリル」

乃亜はとうあえず様子見で電撃を飛ばす

拓海は軽々と避ける

「乃亜君？本気でやらないうとすぐに終わっちゃう…やー…」

拓海は氷の塊を飛ばしていく

乃亜は電撃で相殺する

「やつぱりこなんなんじゃダメか…なら」

拓海は氷の剣を創り切りかかっていく

乃亜は体を捻りぎりぎりでかわすと電撃を飛ばすが剣で受け止められる

乃亜は体を捻りぎりぎりでかわすと電撃を飛ばすが剣で受け止められる

「電撃相手に接近戦はキツイか…使つとは思わなかつたが」

拓海は両手を地面につける

すると部屋中が氷で覆われていく

乃亜は足下に電気を流し自分の周りだけは氷が来ないよう防ぐ

「やうぐると思つたよ、だけど僕にとつてこのフィールドは有利だ  
！」

すると拓海は一瞬で乃亜の背後に着き蹴りを入れる

（さつきより早いつ！）

乃亜は前に思い切り飛びのき回避する

「これは能力ばかりに頼つていられないな

今度は乃亜が一瞬で拓海の背後に入り蹴りを入れる

拓海は氷で蹴りを入れられる部分を覆い防ぐ、拓海にダメージはないが氷は粉々に砕け散る

拓海は距離をとる

「なんてキック力だ… もつ時間も少ない、次で終わらせてもらおつ」

拓海は再び氷の剣を創る

そしてさつきより遙かに早いスピードで突きを入れる

乃亜は動じない

「決ました！」

そして剣が乃亜の体を貫く

しかし乃亜はダメージをくらつておらず剣は乃亜をすり抜けている

「…? …どうことだ…?」

拓海に一瞬の隙ができる

乃亜はその瞬間を逃さず後に回り込み電撃を放とうとする

そこでブザーがなった

「そこまで、両者ノーダメージでこの模擬戦ドロー…乃亜頑張ったわね、拓海はちょっと熱くなりすぎじゃない?」

「久しぶりに熱くなっちゃったよ、乃亜君強いね、測定が終わってないから何とも言えないけど確実にAランクだと思うよ、それにしても最後のとあの高速移動は能力かい?」

「最後のは能力ですよ、高速移動は昔早紀さんに教えてもらつた戦

闘術です」

「教えたって言つても理屈を教えただけじゃない、私だってできな  
いわよ？」

「ひそかに練習してたんですよ、いやあ修得するの大変でしたよ」

「まさかあれをできるようになる人がいるとはね…拓海」

「はい…それもあの人…いやあの人だからこそでしょうか…そ  
れにしてもあの乃亜君、それに実琉ちゃん、もはや僕たちトップ1  
2でももしかしたらかないませんよ」

模擬戦が終わってから、受付で昨日の戦闘の報告をしていた実琉が  
戻ってきて乃亜に声をかける

「乃亜かつこよかつたよー！」

「ありがとう」

「乃亜、実琉、私たちは会議に行つてくるから待つててね」

2人は奥に入つていった

「二人ともお待たせ、さあ帰りましょー」

「早紀氣をつけて、乃亜君と実琉ちゃんもね」

「はい、今日はありがとうございました」  
3人は拓海と別れた

「二人とも、ちょっと話が…」

「何？お母さん」

「せっしきの会議でね…ちょっと決まったことがあって

「勿体振らずに言つてよ母さん」

「2人をトップ12に…加入することが決定して、2人にはそういうことある新しくできた役職に就いて貰つことになったの…私は正直反対だつたんだけどね」

「役職？」

「PMSF（特別公安風紀維持特殊戦闘員）よ

「「PMSF？」」

「昨日も言つたけど、今一部のトランセンダーと無能力者のいわば戦争が起きてるでしょう？基本的にその戦闘に介入、終息する」とが仕事よ」

「俺たち2人だけですか！？」

「いいえ戦闘介入はトップ12やTSSの精鋭部隊もやるわ、あなたたち2人でやるのは戦争自体を止める為の任務よ」

「何で私たちなの？」

「まずランクAであるにも関わらずまだそんなに知名度がないこと。そして、まだ幼いという理由から、体が大きくない為潜入向き、警戒されにくい、また万が一戦闘になつても相手の油断を誘うことができる、こと。最後に2人の能力が向いているということが理由ね……私からしたらやはり不安だわ、TSS側の意見からいえばもう手一杯で打開策がこれしかない……頼みの綱があなたたちだけなの」

「そりなんですか……ならやるしかないか」

「乃亜がやるなら私もやるよ」

2人は明るく言うが真剣だった

「そう、分かったわ……じゃあ改めて……斎藤乃亜、月影実琉の二人をトップ12、そしてPMSFに任命します」

「「はい！」」

そして2人の新たな日々が始まった

—第4話 初任務—

「「いつでもねやー。」

「実琉、乃亞いつてらつしゃい」

2人は家を出ていつもどおり歩いて学校へ向かう

ノルマニ

「ひら実琉、引付くな」「やだ!」…はあ

「乃亜は私のこと嫌いなんだ…うう」

実琉は涙目になる

だからそうじゃないって！」

「じゃあ私のこと好き?」

な？！？あ、ああ（幼なじみとしてだが）」

「そ、かあ、えへへえ」

実琉はさつきの涙目が嘘のように笑顔になる

「はあー」

そんないつものやりとりをしながら2人は学校に着く

昼休み

放送がなる

「斎藤乃亜、月影実琉、至急校長室へ」

「なんだろうね？」

「まあ行つてみるしかないだろ」

2人は校長室へ向かう

乃亜はノックして校長室に入る

「失礼しまーす」

「おう2人とも、待つてたよ」

「用件はなんですか？」

「ああ、2人に初任務だ」

「えつ？」

「おつと、言つてなかつたね、私は神木道明かみきみちあきだ、トップ12の1人で、TSSの精銳部隊のリーダーもやつてるんだ。まあもちろんこの校長もだけどな」

「それで任務とは？」

「この近くで小さい戦闘があるつていう情報がエージェントからきた」

「それに介入して阻止すればいいんですね？」

「ああそうだ、小さい戦闘だから慣れるのにはちょっとビックリだろ、それでは行くよ。俺につかまつて」

2人は道明につかまる

「はい到着」

「えつ？」

「ハハハ、驚いたか？」

「隊長！ 戦闘は始まつてますよー」

「じゃあ俺らはトランセンドー相手にする、2人とも油断するなよ

道明はまた消える

「乃亜！行くよ！」

「いわれなくとも！」

2人は駆け出す

乃亜は例のデバイスを取り出し剣の形にする

実琉は手を前に出し、アサルトライフルを作り出す

2人の前には10人のフラッター（武装した無能力者）

乃亜は正面から突っ込む

10人が一斉に乃亜に射撃する

「乃亜！」

「やばつ……なんてね」

全ての弾が乃亜に当たる前に静止している

「そらよつ！」

弾が発射した人の所に跳ね返る

それによつて7人が倒れる（無論急所は外してある）

3人のうち一人が切り掛かってくる

乃亜はあえて懐に飛び込み相手の剣を根本から切り、電撃を浴びせ  
氣絶させる

その時乃亜の後ろから1人が切り付ける

(今度はマジでやばいっ)

そこで銃声がなり相手は倒れた

「乃亜大丈夫?」

「サンキュー！実琉ナイスフォロー！」

最後の1人が何かを投げる

(？…あれは！)

「実琉目閉じろ…」

「えつ？」

その瞬間閃光が広がる

「乃亜！大丈夫！？」

「あ、ああ、ぎりぎりで気づけてよかつた…あいつは逃げたか、ま  
つたくスタングレネードなんて面倒な物投げやがって…ん？この霧  
と音…まさか…」

「どうしたの？乃亜？きやあ！」

乃亜は実琉を抱きしめ思い切り横に飛ぶ

すると前にみた光線が2人のいた所を通り過ぎる

「くつ」

乃亜は光線が発射された所をデバイスで撃つがそこには何もいなか  
つた

(いつたいあればなんだ?)

乃亜は考えこむ、今の2人の体勢に気づかず、

「おー、おー人さん熱いねー」

「くつ？…ああー、ゴメン実琉」

「あつー…う、うんーー」

乃亜は道明に言われすぐに離れる

実琉は赤くなっていたが、乃亜が離ると少し残念そうな顔をする

「月影、頑張れよ。俺は応援してるぜ」

「はー！神木さん！」

「え？何の」と？」

「あひやー、いつや円影、大変だな」

「わー、乃亜のばか」

「だから何のことだつてー。」

道明に呆れられ、実琉に可愛く怒られたが、いつこひに理由がわからぬ乃亜であった

## —キャラ設定—（前書き）

タイトルどおりキャラ紹介ですよー

## 一キャラ設定一

斎藤 乃亜  
さいとう のあ

16歳

能力 Aランク

メイン 電気を操る+物質の実体を無視する

サブ 見た機械の情報を得る

本作品の主人公

両親は幼い頃に死んで、現在は幼なじみである実琉の家に住み、実琉の母親である早紀が母親代わり

武器に父親が生前作ったデバイスを使っている

脳に負担がかかる為メイン2つは同時に使わないようにしている

恋愛に関しては鈍感？

トップ12で実琉とPMSFを勤めている

月影 実琉  
つきかげ みる

16歳

能力 Aランク

メイン 武器の創造（制御が難しい）

サブ 身体能力1・2倍（反動あり）

本作品のヒロイン

乃亜の幼なじみ

父親は乃亜の両親と共に死んだ

戦闘は真剣そのものだが普段は可愛い女の子、いつも乃亜と一緒にいてよくくつづいている

乃亜のことが好き？

トップ12で乃亜とPMSFを勤める

月影 さき  
つきかげ

38歳

能力 Aランク

メイン ?

サブ ?

実琉の母親で乃亜の母親代わり

透視できるようだが厳密な能力は不明

夫と乃亜の両親とは元から親しい仲だったようだ

トップ12に所属

道上 拓海  
みちがみたくみ

35歳

能力 ランクA

メイン ?

サブ ?

トップ12の1人

早紀とはそれなりに仲がいいようだ

乃亜との模擬戦闘で氷を操っていたが厳密な能力は不明

神木 道明

かみきみちあき

42歳

能力 ランクA

メイン ?

サブ ?

トップ12の1人、TSS精銳部隊のリーダー、そして乃亜と実琉  
が通う高校の校長も勤める

交友関係は不明

瞬間移動のようなことをしているが厳密な能力は不明

—第5話 転校生—

「じゃあ席に着けえー、HRはじめのぞー」

## 担任の先生がクラスに入ってくる

「伝達事項は……得には無いな……おつとそだ、今日は転校生が来てるぞ、入つてこい」

先生が言うと、女の子が入ってきたり

そこで隣に座る未琉が話かけてくる。

「アリ？あの子バーフかな？」

多分そこにはないか？」

末瑞かそういうのも当然、入ってきた女の子は髪は黒ではあるが、目がピンクと水色のオッドアイだつたからだ

「じゃあ自己紹介してくれ」

先生に言われ、おじぎを返してから再び前を向き彼女は口を開く

ГЛАВА III

ミサカ黒表讀ひ

「あのなあ……まあいいかじやあ席は「あれ」…………」ん?」

ミトは乃亜と実琉が座っている辺りを指した

「うーん…そこからで席譲ってくれるやついるか?」

先生が聞くが手を挙げる人はいない

突然ミトが両手をかざし、体全体が淡く光る

「うー…実琉ー!」

「うんー!」

2人は思わず身構える

すると乃亜の前に座っていた女子がミトと同じように光を放ちながら手を上げた

「私…譲ってもいいです…」

「そつか、じやああつちの空いてる席に座ってくれ」

乃亜の前にすわっていた子は空いていた席に移動する

そして座ると2人とも光が消えた

「じゃあお前も座れ、お礼言つとけよ」

ミトは先生に言われ、席に着く

「これでHR終わり、解散！」

先生が出ていくと何人かミートの周りに集まつてくれる

「ねー!!アヒヤん」

「何?……」

「なんで転校してきたの?」

「機密事項……」

「じゃあ好きな子とかいるの?」

「好き?…大事って?」と?..」

「大事…うーんまあそつかな

「乃亜と実琉……」

「うーんそうこう」とじゃなくて…とこうか斎藤君と田嶋さんぽい  
トちゃんど知り合い?..」

そう言われる人は考える

「うーん何か覚えてる?乃亜?..」

「そーだなあ「乃亜…」ん?うわっ!..」

突然ミトが乃亜に抱き着いた

「なつ…ミトちゃんだけずるいつ！私も！」

と実琉も乃亜に抱き着こうとするが…

「…あれっ？こんなやり取り前に…デジャヴかな？乃亜？」

「いや俺も何か覚えが…でも思いだせないな…」

「ん？」

ミトが首をかしげる

「…ああ気にしなくてもいいよ、とりあえず知ってるみたいだけど、俺は瀬藤乃亜でこっちが」

「丹影実琉だよ、よろしく」

「ようじく……後で話…昼休み…屋上…来て」

そう言つてミトは座ってしまった

昼休み、屋上…

「それでミトちゃん、話つて？」

実琉がミートに尋ねる

「ミートに来た役割…」

「役割？」

「わ…私は2人を守る為に来た…」

「俺達を…守る為?」

ミートは頷く

「何で何からなの?」

セツの言つた途端、急に霧が出始めた

「これってまさしく「来る…」

ミートは実琉と乃亜を突き飛ばし、自分も前に飛び退く

すると、セツにレーザーのようなものが通り過ぎた

「これってこの前の…」

突然辺りに男の声が響く

「外したか…おつ試作の号三型、そんなどこか…ちよつといこま  
とめて消しちゃうやん」

「…」の声が…あ…

「えつへ~じうしたの乃亜?」

「さつ もの壱子供の時によく行つてた公園の近くにあつた研究所のおじさんの」

「あつー~言われてみれば…つてこよせマトツのマト~。」

「だらひづね、やつと思つ出したよ」

「でもあの時のマトはもつと明るかつたよお」

「フーん…待てよ、ソコまでの事を考へると…」

乃亜が考へていると、発田が乃亜に向かつて來た

するとミート光りながら、瞬時に乃亜の前に立ち手をかざした

そして手を振ると、レーザーがミートの手から放たれた

遠くで何かが爆発した

「ぐつ~やられたか!~いつか必ずお前らをつ~」

ミートはふりかえり、乃亜に聞く

「乃亜…大丈夫?」

「ああ……あつがとアリバア！」

乃亜はそつ言いながら能力を使つ

「推測通りなアリ……やつぱりか」

「乃亜何か分かったの？」

「ああ、アリは……アンドロイドだ」

「えええ！？ 本当！？」

「ああ、情報を読み取れるからな……ん？ これって……」

乃亜がアリの頭にふれる

「ちよつと悪いな」

そして乃亜は頭に電気を流した

「アラ－10352… 感情制御装置に攻撃を受けました。装置防衛モードに移行します」

「乃亜！ な、何が起きたの？」

「頭に後付けの感情を抑える装置が付いてたから、昔みたいじゃないのはコイツのせいだと思つて電気流して壊そつとしたら、防衛モードに入っちゃった」

「えつそれつて……」

「ああ、ものすゞくマズイ事になつた」  
「攻撃を開始します」

「つー来るぞつー！」

「うんー！」

そしてミトが2人に襲い掛かってきた…

—第6話 旧友の救出—（前書き）

更新遅れちゃいました

すいません

## —第6話 旧友の救出—

実琉は、アサルトライフルを作り出し、飛びかかってきたミートに牽制で発砲する

「攻撃確認…回避…反撃」

ミートが左手をかざすと、弾が弾道をそらされた

そのまま空中で前に回転して、実琉にかかと落としする

実琉はアサルトライフルで受け止めるが、真つ二つにへし折れた

「実琉！！大丈夫か！？」

乃亜は実琉に駆け寄りつつ、電撃を放つ

ミートは、反動で後ろに飛び退きかわす

「実琉！！援護頼む！！」

「おつけー」

乃亜はデバイスを剣に展開して走り出す

「対象接近…迎撃」

「とつとど、目を覚ましてくれよつ…」

乃亜は、勢いのまま横にデバイスを振る

ミートはしゃがんでかわし、ロー キックを放つ

「くっ……」

乃亜はバック転でかわす

その間に実琉は再びアサルトライフルを作り出して、ミートに発砲する

ミートはそれをバックステップで避けた

「……追撃

ミートは、低い姿勢から乃亜に向かって、一気に飛び出す

乃亜はデバイスを銃に変え、ミートに向かって撃つ

ミートは体制を低く保つて走り、かわしながら乃亜に襲いかかった

「危なっ！！」

乃亜は、思い切り横に飛び退く

「今度は私がつ！！」

実琉はハンドガンで撃ちながら、走る

「アホみたいに飛び上がるがつてかわす

実琉はハンドガンを手放し、今度は短剣を作り出す

そして、空中にいるアホへ切りかかる

ミトは体をひねってかわし、その勢いで回し蹴りを放つ

「やばっ…… もう……」

実琉はとっさに腕をクロスし受け止めたが、下にたたき落とされた

乃亜はデバイスで空中で不安定な体制なアホを撃つ

ミトはかわしきれず、電撃の弾が右肩にかすった

「右肩負傷……」

「アホ……乃亜だ……思って出してくれ……」

「危機状態……コミット解除」

「まだダメみたいだね……」

「ああ、気を抜くなよ……おわつ……」

「えつ……何……あやあ……」

突然ミトがものす”いスピードで突つ込んできた

一人はなんとかギリギリで避ける

実琉は短剣を手放し、サブマシンガンで撃つ

ミトは振り返り気にせず再び二人のほうへ向かってきました  
すると、弾がミトに当たる直前に全て消え去ってしまった

「つー?なんだ今の」

今度は乃亜が電撃を放つが同じようにかき消される

「まさか…あつダメだ!! 実琉!!」

実琉は再び短剣で切りかかっていた

「間に合えつ…!」

乃亜は実琉の所へ駆け出す

実琉の短剣はミトへと届く前に消えてしまう

「えつー?」

ミトは隙を逃さず、実琉に殴りかかった

乃亜はギリギリで実琉を突き飛ばし、庇う

「ぐあつ……」

「乃亜つ……」

乃亜はミートに殴られ、吹き飛ばされた

「乃亜つ……大丈夫！？」

「ああ」

「あれ、どうなってるの？」

「仕組みは分からぬけど、能力の攻撃を無効化してるみたいだ」

「そんなことって……？」

「俺も信じがたいけど、それなら納得がいく」

「……」めんね、私の不注意で……

「いや、いいんだ、実琉が無事が一番だ」

乃亜はそう言つて立ち上がり、ミートに向かい合つ

「さて、久々に派手についりますかあ」

そして、次の瞬間… 乃亜はミートの田の前にいた

「これが、今のお返しだつ」

乃亜はミドルキックを放つ

ミートは腕でガードする

「次は実琉を狙つたぶんっ」

乃亜はガードで跳ね返つた反動のまま、回転して手刀を叩き込む

ミートはしゃがんでかわす

「あひんと…へりつとかつ」

乃亜はその回転を利用して、後ろ回し蹴りをする

ミートはまたガードするが強烈な蹴りに弾かれ、よろける

「次は、俺たちのことをわすれて、暴走してるぶんだつ！－！」

「かはつ！－！」

再び放たれたミドルキックが横腹に入つて、倒れた

しかしミートは立ち上がり繰り返し殴りかかる

乃亜はすべてをかわしていく

「乃亜……助けて……」

しかしその時、ミートは攻撃しながらもやつて言つて、目からは光るもの

が、流れ落ちた

「ああ、最初からそのつもった」

乃亜はミトの攻撃を弾き返し、バックステップで距離を取ると同時に田線で実琉に合図する

実琉は頷き、飛び出してきてミトを後ろから羽交い締めにする

「ああ、これで、戻つてこいつ……！」

乃亜は拳を前に突き出した状態で、一瞬で再び距離を詰めた  
ミトの顔の前で拳がとまつた…と同時にミトの頭の中で何かが壊れた音がした

そして、ミトは微笑みながら倒れた

「やつた…のかな？」

「ああ、おそれぐ…」

「最後何をしたの？死んでないよね」

「ああ、死んでない…」「一ん簡単に言えば感情制御装置。ピン。ポイントに打撃を加えたんだ」

「そんなこと出来るのー?」

「ああ、これも前に言つた早紀さんに教えて貰つた技だよ」

「すこねつ！！」

「ああ、ありがた：かはつ」

突然乃亜が血を吐き出した

「乃亜つ！？」

「やっぱり久々で酷使しちゃったか……」

「ちよつと乃亜つ——乃亜つ——」

実琉の呼びかけを聞きながら、乃亜の意識は遠のいていった……

## —第6話 旧友の救出—（後書き）

一応じの小説も放棄する」ことはないですよ

できるだけ早く更新できるよう頑張りますっーー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1801t/>

---

トランセンド

2011年10月9日02時47分発行